

西班牙紀行 (二)

小牧實繁

五月二十七日、月曜日。八時半起床、朝食を済ませて菅氏にさよならし九時半中村中西兩氏と一臺の自動車を備つてトレド (Toledo) 見物に出かける。トレド門を経てトレド橋にかかると右手に昨日のサン・イシロドの砂採場が見える。顧みればマドリッドの中新層臺地は殆んど水平と言つてもよい位に平坦に見える。遠方には殘丘 (butte de temoins) が認められる。

田舎の景色は大分變つてゐる。灌漑には井戸を使つてゐる所が多く井戸から水を汲み上げるのは馬の仕事にされてゐる。村と村との間は中々遠くそこは廣々とした野原である。村へ來ると人々が珍らし相に我々を眺める。日本人が珍らしいのだらう。我々から言ふと村の民家が非常に珍らしく中々面白い。殊にその南國の熱い

日射を避けるためらしい構造が特に吾々の興味を引く。一つは亞拉比亞の建築から可なり多くの影響を受けてゐるのであらう。

廣々とした麥畑を貫く大道の真中で突然バンクした。心細いが時々通りすがりの自動車が中には停車までして親切な言葉をかけて行つて呉れるので先づ心強い。

十一時再び走り出し橄欖や葡萄の植ゑられた野を通り過ぎて十二時トレドに着く。

實際トレドは古い珍らしいもの美しいものの集塊である、我々は此所に色々の名あるものを見た。主としては歴史上の遺蹟や古建築類であるが、一々それを叙述するのは私の柄ではなく又その暇もない。唯自分がそれ等の由緒ある遺蹟に感興を覺え優れた古建築美を鑑賞し得た以外に

氣づいた二三のこと柄を記すに止める。

城壁用、舗道用の煉瓦を天日で乾してゐるのは流石に西班牙だと思はれ、又御寺の中に花崗岩で作られてゐるものがあるのは珍らしいと思つた。今まで西洋の寺院建築に花崗岩の使用せられてゐる例は餘り見なかつたから。

案内せられて黄金細工の工場を見る。何れも手工業でやつて居りトレドの名産になつてゐる。古都の特産としては殊に相應しい様に思はれる。中々精巧なものである。カフスボタンやネクタイピンや小刀その他色々のものがある。例の巴里の西班牙黄金細工商の店頭を飾るものは實は之れなんである。土産少々買込む。

ホテル・カスチラ (Castilla) でツーリストらしく中食をとる。中々氣持のよいホテルである。

食後伽藍、グレコの家 (Casa del Greco) グレコの博物館 (Museo de Greco) 等を見たがこれが中々の大物で唯々嘆賞する中に早や六時となつた。それ等の叙景叙述は又た私の手に終へ

ぬものであることを白狀しなければならぬ。

七時過フロリダ館に歸り、先日注文して置いた博物館出版物の代金立替を支拂ひ (三〇ペセタに割引して貰ふ) 日本へ郵送することを番頭に依頼し宿泊の支拂を済ませて最後の町の散歩を試みマドリッドの地下電車てどんなものかと好奇心で乗つて見る。悪くはないばかりではなく中々乗心地はよい。清潔でもある。

九時半夕食十時半宿を出で十一時二十五分發列車でマドリッド・アトチャ驛 (Atocha) を去る。

五月二十八日、火曜日。七時半車中の眠りは覺めた。窓外の乾燥景觀が先づ眼を引く。氣候は非常に乾燥らしいが耕作は行はれてゐる。土壌は非常に赤い。作物としては小麦や橄欖やが認められる。地形は殘丘を有つ臺地がその基調をなしてゐる。

八時半バエザ (Baesa) 驛で乗替、ビュフォーで朝食、中村君が時間待ちの退屈凌ぎに寫眞を

撮つたりする。此所の御婆さん達は日本では大分昔に流行した黒の毛絲の肩掛けをしてゐる。田舎だなど思ふ。

九時三十五分バエザ驛發。地形は大分凹凸を有つ様になる。然し地物は相變らず氣候の乾燥を物語つてゐる。十一時半ラルヴァ (Tarva) 驛着。此の邊には豚が多く飼はれ作物としては小麦と橄欖とが多く見受けられる。

シエラ・ネヴァダ (Sierra Nevada) の麗姿が遠望せられる。五月だが雪の衣を被た姿がこよなく崇高である。窓外にはジプシーの穴らしいものが所々認められ、又驢馬に乗つて行く人達を見る。

二時モレア驛 (Morea) 着、構内で中食、二時二十五分モレア驛發、全五十分ピナル驛 (Pinar) 着。此の邊にはポプラの樹立が多く作物としては依然橄欖と小麦とが卓越し、家畜では羊と山羊とが多く飼はれてゐる。そして所々に石灰洞が認められるのが氣になる。

時間表によるとグラナダももう近い。耕作は急に集約的となる。作物としては蠶豆、小麦、葡萄、無花果、橄欖が多く見られる。

シエラ・ネヴァダが更に近くなり、遠く車窓からグラナダの町が見え初めた。そして四時二十五分汽車は終に懂れの都グラナダに着いた。

五時ホテル・アルハンブラ・パラス (Alhambra Palace) に入る。堂々たるそして落着きのある鎄の着いた、グラナダには誠に相應しい氣持のよいホテルである。恐らく此れ程のホテルは世界中でも數へる程しかないと思ふ。

郷に入つては郷に従へだ、餘りむさ苦しくて居ても悪いと思ひ顔を洗ひ煤煙をはらつて御茶を楽しみ飲む。景色はとてもよい。御茶やトーストまで美味い様な氣がする。

すがすがしい氣分で町を散歩し、八時半宿に歸り九時夕食。流石にグラナダを訪れようと云ふ人達である、御客は人並以上の紳士淑女ばかりで氣持がよい。

繪端書を買ひ眞夜中まで便りの文を書く。

五月二十九日、水曜日。九時起床、九時半朝食、アルハンムブラ (Alhambra) を訪れる。建築専門の中西氏が同道であるから面白く見物出来る。アルハンムブラを見たと言ふ喜びで心も浮き浮きする。そして其の城外の景色の又なく美しいことよ。谷を隔ててジプシーの白く塗つた穴なども見える。建物や苑泉の配置などは否應なしにオリエントを思はせる。然し勿論支那的日本的なものではない。誠に近東の香り高さものである。深く建築を解しない自分も此の一大藝術作品の前には唯々嘆聲を發するのみであつた。

日の光の強い泉のある庭などを散歩して一時半宿に歸り中食。南國の古都の香に酔つて何だかバラダイスにでも居る様な氣がする。

旅の身とは思へない位の落着きと心安さを感じながら日記を書いたり手紙を書いたり等して四時まで休み、それから山田先生、福島中

西・中村三君等と自動車を驅り、ルネッサンスの御寺を一つ見た後ジプシーの家を訪れる。小人数で行つたのでは中々危い相だ、時には歸らぬ客となることもあると云ふ。五人にショーファーも居るから先づ／＼安心と思ふ。村を通るとあちらでもこちらでも御這入りなさい／＼と切りに勧める。見た所は更に危険らしくも思へない。

一軒の家に入る。洪積層らしい礫層の横腹に穿つた洞窟に白い石灰などを美しく塗つてとも角も住家にしつらへてゐる。

これこれ呉れば踊りを見せると言ふ。少し高いが踊りを見なければ此の村を訪れた甲斐がなくなる、よろしいと言ふと、椅子など出して座つて呉れと言ふ。そして音楽が初まり數人の女がテンポの早いジプシー特有の踊りをカスターネット等に合はせて踊る。確かに地方色の豊かなものである。到々數曲踊つた。

氣味が悪いが恐ろしいもの見たさに奥の室を

のぞいて見る。踊りをやつたのが入口の玄關又は客室とすると中は臺所や居間と云ふ譯だらうがその間には幕をたれて隔てとしてゐる。中の方も決して汚ならしい所ではない。然しその又奥に何があるかは見る由もない。

五時半歸途につく。沿道のジプシー共なかなか愛想よく送迎する。先程御寺を見るために歩いた邊の貧民街の腕白小僧等と比べると却て印象はよい。

御茶を喫み散髪をさせたり今後のプログラムを考へたりなどして九時半夕食。

食後電車で町に降り御祭の市中を散歩する。何處も大變な人出である。どうせ解らないのだが劇場に入つて見る。觀衆が異なるのみで別に變つた點も多くはない。來がけの汽車で一所だつた旅役者がやつてゐるのは面白かつた。

劇場を出て今度は電車にも乗らず勾配の強い坂道を登つてホテルに歸り一時半就寢。

五月三十日、木曜日。九時起床、今夜出發の

準備をなし置き十時半朝食、十一時半ゼネラル (Generalife) を見物する。グラナダの全景を擅にすることが出来る。郊外の人家また點々とした山の斜面のジプシーの家まで見える。何れも白く塗られて確かに一種の快い地方色を見せてゐる。グラナダの家も勿論白く塗られてゐるが屋根は褐色である。ゼネラルは建築も勿論面白いのだがその庭殊に水のある初夏の庭は傑作である。

一時半宿に歸り中食。四時まで休息、再び出でてアルハンブラを見直す。何度見てもよいと思つたからである。古いタイルやアラビヤ的の硝子などよき土産を買ふ。

六時半宿に歸り茶を喫みながら休息し又手紙を書く。此所程よく手紙の書ける所はない。

九時宿を出て自動車で驛に向ふ。所が大變、今日も御祭だ、人出で自動車が動けない。出發の時間は迫る。行きかふ男女の美しさに眼を奪はれながらも氣が氣でない。漸く血路を開いて

九時半の發車に間に合つた。

十一時モレダ (Moreda) 驛のビューフェーで夕食、十二時車中の寢に就いたが何だかよくは眠れなかつた。

五月三十一日、金曜日。六時車中の眠りは覺めた。丁度日の出である。窓外には低平な平野が開け、葡萄、小麥などが耕作せられ手入れも中々よく行届いてゐる様に見える。土壤は矢張り赤味を帯びてゐる。

七時過アルカザール (Alcazar) 驛。七時半フォンダ驛 (Fonda) 着。構内で朝食をとり、村の中を散歩して見る。大した御寺でもないが暇つぶしに御詣りする。それでも尙時間があるのが果實蔬菜類等の市場に行つて見る。否實際はぶら／＼歩いてゐたら市場に逢着したと言ふ方が本當である。恐らくこんな重要でないものを見物に來た日本人なんかは殆んど今まで一人だつて無かつただらうと思ふ。村人は不思議相に我々を眺める。でも村のただずまひや朴訥な田

舎人の風俗や民家などを面白いと思つて見た。尙時間が有餘つて仕方がないが見るべきものもないので驛に歸り休息しながら無爲に列車を待つ。人間にしても汽車にしてもその他何にしても西班牙のものは物皆が呑氣である。焦燥とか急速とか又時には精密正確と云ふものすらが缺けて居る様に思はれる。汽車の連絡の悪いのなんかも確かに西班牙全體に通じた地方色である様に思ふ。眞夜中の乗替なんかも不思議なる存在の一である。それだけ歐羅巴の旅行でも西班牙の旅行程面白いものはないと思ふ。

十一時二十分アルカザール驛發、一帶の耕地には小麥と葡萄とが注意深く栽培せられてゐる。サンタ・マルタ (Santa Marta) の邊では石灰岩地の景觀が開ける。食堂で中食をとる。

二時チンテラ驛 (Chinchilla) 着。此の邊には植物として松と橄欖とを見、家畜としては羊と馬とが飼はれてゐる。古い村では天日製煉瓦を見る。遠くには石灰岩の丘の上に城と村とが見

える。中々面白い景色である。

橄欖が入念に栽培せられた畑、それが山の斜面にまで耕作せられてゐる所、自壘、マルヌ、石灰岩の露頭の見える所、河成段丘のある所などをひた走つて五時ジャティヅァ (Jativa) 驛着。之れは壘壁を繞らした城砦都市で郊外には野菜畑、蜜柑畑、柘榴畑などがある。城壁の附近には石灰岩の洞窟が見える。遺跡の一つかも知れないと思ふ。

ジャティヅァから更に進むと蜜柑畑の外に多くの水田が開け稲が作られてゐる。見た所日本の稲と大した相異はない。二年振りに見たのである。何とも言へず日本戀しくなる。水田は用水路で水を引いて灌漑されてゐる。

六時カルカゼンテ驛 (Carcagente) 着。之れ

は蜜柑栽培の中心地である。蜜柑の栽培には人工灌漑をやつてゐるのが目に着く。土壌は相變らず赤い。又所々棕櫚の木が認められる。農作物ではその外に馬鈴薯、葱、小麥を見、果樹としては又枇杷、無花果、杏子等を見る。

六時半終にヴァレンシア (Valencia) に着く。音に聲くヴァレンシアに來たのだ。ヴィクトリア館 (H. Reina Victoria) と言ふのに入る。

顔を洗つて休息し九時夕食、食後市内を散歩し、繪端書を買つたりカフェーに這入つて見たりする。カフェーは佛蘭西のそれと大差はないが客もギャルソンも西班牙人ではあり少しづつは變つてゐる所もあつて又一種の味はひがある。秋波を送る女共も少しは居る様に思はれた。ホテルに歸り十二時就寝。